

長279海Ⅱ100 参考資料3-3

| 意見番号 | 委員 | ページ | 行数 | 文章 | 意見等 | 回答 |
|------|----|----------------|-----------------------|---|---|--|
| 1 | 宮澤 | 本文全体 | | 「今回」という語の使い方について | 「今回」という語が「何度も使われているが、それが「第二版」という意味と、「第二版 一部改訂」という意味の、二種類の意味で使われている。これにより、「今回」に続く文章が、「第二版」で既に改訂していたのに、改めて「第二版 一部改訂」においても新しく改訂した内容であるように読めてしまうところがある。従って、「第二版」での改訂内容については、「今回」と書き表すのではなく「第二版」で改訂したことを明記する方が良い。 | 「今回」に続く文章が「第二版」のみの場合は「第二版」、「第二版 一部改訂」でも適用できる内容であれば「第二版及びその一部改訂」に変更しました。また、文章について整合するように適宜修正しました。 |
| 2 | 宮澤 | 45 | 8 | (式) | 式番号がない | 未参照のため式番号を振っていません。 |
| 3 | 宮澤 | 54 | | (式) | 式番号がない | 未参照のため式番号を振っていません。 |
| 4 | 加納 | 9 | 9 | 陸域において | 陸域でしょうか？ | 前の段落では海底の観測網、本段落では陸域の観測網によるデータの解析をイメージしています。しかし、スロースリップの観測は海底の観測網でも可能かと思いますので、除きます。 |
| 5 | 加納 | 13 | | 図4の説明 | 説明文のケースⅠ～Ⅴとまぎらわしくないでしょうか？ 数字の記号がらがうので問題ないかもしれません | ケースⅢ、Ⅳと表記しました。 |
| 6 | 加納 | 13 | | 図5の説明 | 説明文では期待値 | 説明文P53(説明文図4-4の引用部)では確かに期待値でした。修正します。 |
| 7 | 加納 | 26 | | 下から13 | 安政東海・東南海 | 修正しました。 |
| 8 | 加納 | 26 28 38 | 下から12 下から7 下から4 | 単純に安政東海・東南海の2地震の震源域が一度に破壊した地震ではないことが指摘されている(松浦ほか、2010) 単純に安政東海・南海両地震の震源域が連動したものではない(松浦、2012) 地震が単に連動しただけでなく、両地震の震源域が異なっていた可能性が指摘されている(例えば、松浦ほか、2010) | 松浦ほか、2010と松浦、2012の両方を引用するか、片方に統一？ ふたつの引用を使い分けられているならママでよい | 26,38Pは両方引用し、28Pはそのままとしました。 |
| 9 | 加納 | 27 | 13 | グレゴリオ暦 | 先発グレゴリオ暦 仮想的なグレゴリオ暦では(など、この年代にグレゴリオ暦は存在しないので) | 先発グレゴリオ暦としました。 ※日本被害地震総覧では、1582年以前でもグレゴリオ暦と表記しています。 |
| 10 | 加納 | 33 | 3 | 1923年から | 1923年から2012年 | 修正しました。 |
| 11 | 加納 | 33 | 6 | なお、日向灘ではM7.0を超えるような地震が10～20年に1回程度発生している。 | 2024年8月8日の地震には触れないのか？(地震調査委員会、2024) | なお、2024年8月8日の16 時 42 分に発生した日向灘の地震(M7.1)など、日向灘ではと修正しました。 |
| 12 | 加納 | 43 | 下から13 | 信頼性の高い | トル。あとでデータの信頼性について議論しているので | 修正しました。P44 にも「信頼性の高い」とあるので、こまもとりました。 |
| 13 | 加納 | 46 | | 試算結果 | 改訂前との違いについて説明する必要はないでしょうか？ 評価基準日の方がいとベイズ推定を採用したこと。評価のやり方が変わったのであって、地震そのものの起き方が変わったわけではないことを説明できるように | 「なお、第二版の段階では、評価基準日を平成 25 年(2013 年)1 月 1 日として算出し、かつベイズ推定は導入されていない。」という文を末尾に付けました。 |
| 14 | 加納 | 48 | 17 | 求められており | 記録あるいは観測されており知られており | 「観測されており」に修正しました。 |
| 15 | 加納 | 48 | 22 | 2001ab | 2001a、2001b？(書式に合わせる) | 「ab」→「a、b」に修正しました。(第二版P28では、(相田、1981a、b)と表記) P49も同様に修正しました。 |
| 16 | 加納 | 48 | 下から5 | 歴史資料 | 史料(前半では史料に統一されているようなので、ほかの部分も) | 修正しました。 |
| 17 | 加納 | 48 | 下から4 | 水深記録に | 史料記録の解釈に | 修正しました。 |
| 18 | 加納 | 48 | 下から1 | 史料データ | 史料から得られるデータ | 修正しました。 |
| 19 | 加納 | 49 | 2 | 史料 | 史料の記録や解釈 | 修正しました。 |
| 20 | 加納 | 49 | 2 | 隆起量データ | ここ以降「隆起量データ」となっているが、これより前は「隆起量」、データとつける意図は確率評価に用いる数字という感覚か？例えば48ページ17行は隆起量データが得られており、としてもよいのか？ | 隆起量と隆起量データは基本的に同じ意味として用いています。前後のつながりを考えた際、「データ」を追加した方が良い場合は追加しました。 |
| 21 | 加納 | 49 | 13 | 歴史記録における隆起量 | 歴史記録から得られる隆起量データ (「歴史記録」と「史料」はどのように使い分けられているのか？) | 修正しました。(使い分けは特に意識していないように思えます。) |
| 22 | 加納 | 49 | 15 | 広範な | 幅のある | 修正しました。 |
| 23 | 加納 | 49 | 16 | 歴史資料 | 史料 | 修正しました。 |
| 24 | 加納 | 49 | 17 | 宝永地震における室津港の隆起量を記録した歴史資料…大別される | 宝永地震における室津港の隆起量が得られる史料のおもなものとして…がある (「久保野家文書」は直接隆起量を記しているわけではないので) | 修正しました。 |
| 25 | 加納 | 49 | 20 | 総称である | 総称である(高知県立高知城歴史博物館寄託)。 | 修正しました。 |
| 26 | 加納 | 49 | 22 | 普請用の竿 | 「普請方之竿」 | 修正しました。 |
| 27 | 加納 | 49 | 24 | 地方之竿 | 「地方之竿」 | 修正しました。 |
| 28 | 加納 | 49 | 21 | まず「久保野家文書」の記述からは、測量に用いられた竿の解釈の違いに基づき、二通りの隆起量が推定されている(橋本ほか、2024a)。第一の解釈は普請用の竿が用いられたとするもので、この場合、測定値1.7mから1.9m、およびそれに対応する測定誤差0.5mが得られる。第二の解釈は地方之竿を基準としたものであり、こちらは測定値1.4mから1.5m、測定誤差0.3mとされる。 | まず「久保野家文書」の記述からは、地震前後の室津港の水深が推定でき、さらにその差から地震時の隆起量を推定できる。橋本ほか(2024a)を参考にすると、測量に用いる竿の解釈の違いにより、1.7mから1.9mまたは1.4mから1.5mの二通りの測定値が得られる。第一の解釈は普請用の竿が用いられたとするもので、第二の解釈は地方之竿を基準としたものである。また、余効変動の継続時間に幅を持たせて推定したため、それぞれの値に幅がある。橋本ほか(2024a)は、潮汐による潮位のばらつきや測定誤差を考慮し、0.3～0.5 mを誤差の目安とした。 (橋本・他では「万変記」も合わせて議論しているのに対し、ここでは「久保野家文書」の部分だけを抜きだしているため、橋本・他は参考とすべきでしょう) | 提案の通りにしたいと思います。 |
| 29 | 加納 | 49 | 下から7 | これは伝聞情報であると解釈されていない | これは伝聞情報であると解釈されている | 修正しました。 |
| 30 | 加納 | 50 | 9 | 主に「久保野家文書」の一部でもある「室津港手鏡」(以下、「手鏡」) | 主に「久保野家文書」 (「室津港手鏡」だけ区別する意味はないと思います) | 修正しました。 |
| 31 | 加納 | 50 | 11 | (今村、1930; 橋本ほか、2024a) | (今村、1930; 都司、1988; 橋本ほか、2024a) | 修正しました。 |
| 32 | 加納 | 50 | 13 | 歴史資料 | 史料 | 修正しました。 |
| 33 | 加納 | 50 | 14 | 先の宝永地震の記録とは異なり、 | 先の宝永地震の記録と同じく、 | 「これらの史料には隆起量のみが書かれており、宝永地震と同様に測定方法は不明である。」と修正しました。 |
| 34 | 加納 | 50 | 15 | 利用可能な情報から最大限の不確かさを評価に反映させるという観点に立ち | くであるならば、宝永のほうも誤差は0.5mlに統一すべきでは？ 竿の違いは1尺=0.3mという換算でいいのか？という問題なので、安政でも同じです) | 【P】確認、修正中です。 |
| 35 | 加納 | 52 | 表4-4 | 久保家文書 | 久保家文書 | 修正しました。 |
| 36 | 加納 | 52 | 表4-4 | 手鏡 | 久保家文書 | 修正しました。 |
| 37 | 加納 | 53 | 8 | 「久保野家文書」の記録は、地震発生から約50年後と時間的な隔たりがあり | 「久保野家文書」の地震後の水深記録は、地震発生から約50年後と時間的な隔たりがあり | 修正しました。 |
| 38 | 加納 | 53 | 下から3(など) | 期待値 | 本文の図5の説明では「平均値」 | 統一します。 |
| 39 | 加納 | 54 | 14 | 理論上 | このモデルでは | 修正しました。 |
| 40 | 加納 | 54 | 21 | u | 斜体に | 修正しました。 |
| 41 | 加納 | 55 | 4 | 本モデルの | 南海トラフにおいて本モデルの | 修正しました。 |

| | | | | | | |
|----|----|-----|-------------|--|--|---|
| 42 | 加納 | 60 | 下から4 | 得られた痕跡データと地震動や津波のシミュレーションと組合せる | 得られた痕跡データと地震動や津波のシミュレーションを組み合わせる 得られた痕跡データを地震動や津波のシミュレーションと組み合わせる (組み合わせと組合せの揺れはほかにもあり) | 「得られた痕跡データと地震動や津波のシミュレーションを組み合わせる」を採用します。 |
| 43 | 加納 | 63 | 6件目 | Ando, M. (1982) | カッコの前のスペーストル | 修正しました。 |
| 44 | 加納 | 63 | 8件目 | KOPF | Kopf | 修正しました。 |
| 45 | 加納 | 64 | 9件目 | Seismological Research Letters | Seismol Res. Lett. | 修正しました。 |
| 46 | 加納 | 67 | 1-2件目 | 地震第1輯, 第2巻 | 地震1, 2 (3件目と同じ) | 修正しました。 |
| 47 | 加納 | 69 | 11件目 | Geophysical Research Letters | Geophys. Res. Lett. | 修正しました。 |
| 48 | 加納 | 71 | 8件目 | 中田 高 | 中田 高 | 修正しました。 |
| 49 | 加納 | 75 | 7-8件目 | 柴田 亮 | 柴田 亮 | 修正しました。 |
| 50 | 加納 | 75 | 8件目 | 妥当性について, 39 | 妥当性について, 歴史地震, 39 | 修正しました。 |
| 51 | 加納 | 77 | | | 参考文献に都司(1988)を追加 | 修正しました。 |
| 52 | 加納 | 88 | 図3-9の説明 | なお、震度5弱及び5強は震度5と表現し、震度6弱以上は震度6以上と表現した。 | 当時震度5弱強、6弱強は存在しません | https://www.data.jma.go.jp/eqev/data/study-panel/shindo-kentakai/kentakai2/ken2-2.pdf 表現を変更しました。 |
| 53 | 加納 | 93 | 図3-16と図3-17 | | 図3-16と図3-17は順序が逆？ | 修正しました。 |
| 54 | 加納 | 95 | 図3-20の説明 | 蟹が池 | 図中では蟹ヶ池 | 修正しました。 |
| 55 | 加納 | 99 | 図3-26の説明 | 1944年の東南海地震 | 1944年昭和東南海地震 (本文と統一) | 修正しました。 |
| 56 | 加納 | 99 | 図3-26の説明 | C: コア位置図 | C: 図3-27に示すコア試料が採取された掘削孔の位置図 (たった80cmのコアと数100mの掘削孔は対応しない) | 修正しました。 |
| 57 | 加納 | 100 | 図3-27の説明 | コアの位置を図3-26に示す。 | コア試料が採取された掘削孔の位置を図3-26に示す。 | 修正しました。 |
| 58 | 加納 | 101 | 図3-28の説明 | | マグニチュードの範囲(下限)を示すべきではないか、M5？ | 【PJM】の下限を調べ、注に記載予定。 |
| 59 | 加納 | 100 | 図4-4の説明 | 隆起量 | 隆起量データ | 修正しました。 |
| 60 | 佐竹 | 9 | 下から6行目 | しかしながら、今後、 | しかしながら、必要か？(前の文と逆説ではない) | 「さらに」に変更しました。 |
| 61 | 佐竹 | 7 | 下から8行目 | ケースⅢ | ケースⅢ(説明文表4-2)とすべきでは？(本文には説明がない) | 修正しました。 |
| 62 | 佐竹 | 5 | 表2-2 | ケースⅢ | 同上 | 修正しました。 |
| 63 | 佐竹 | 13 | 図4の説明 | ケース①、ケース② | ケースⅢ、ケースⅣ(説明文表4-2)とすべきでは？ | 修正しました。 |
| 64 | 佐竹 | 14 | 表2-1 | ベイズ事後平均95.1年 | 表4-8では、95.2年となっている | 95.2年に修正しました。 |
| 65 | 佐竹 | 27 | 9 | Spallone et al. (2022) では | Spallone et al. (2022) は | 修正しました。 |
| 66 | 佐竹 | 27 | 10 | 今回の評価にあたっては、慶長地震を含む場合と含まない場合と両方を考慮することとした。 | 今回の評価にあたっては、南海トラフの過去の地震として、慶長地震を含む場合と含まない場合の両方を考慮することとした。 | 修正しました。 |
| 67 | 佐竹 | 43 | 18 | 正平(康安)地震以前を含める場合と含まない場合など複数のデータセットを作成して比較を行う | 正平(康安)地震以前を含める場合と含まない場合、慶長地震を含める場合と含まない場合など複数のデータセットを作成して比較を行う | 修正しました。 |
| 68 | 佐竹 | 55 | 6 | Bの事前分布 | 具体的な分布($\beta=0.56\sim2$ ($V=5\sim18\text{mm/year}$ 相当)として、この幅を±3シグマとする→ $\beta=0.24$)を書かないのか | 付録に記載予定です。 |
| 69 | 佐竹 | 56 | 表4-6 | μ の事後平均、95.2年 | 表2-1では、95.1年となっている | 表2-1を修正しました。 |
| 70 | 佐竹 | 109 | 図4-2 | 今後30年間に南海トラフで大地震が発生する確率の頻度分布(BPT, ケースⅢ) | 今後10, 20, 40, 50年(表2-1)のグラフも示した方がよいのでは？ | 図4-8を追加しました。 |
| 71 | 佐竹 | 110 | 図4-5 | 今後30年間に南海トラフで大地震が発生する確率の頻度分布(SSD-BPT) | 今後10, 20, 40, 50年(表2-2)のグラフも示した方がよいのでは？ | 図4-9を追加しました。 |
| 72 | 穴倉 | 3 | 6~8 | 、約2000年前に | この10年余りで2000年前超巨大津波説を肯定するデータはなく、地震予知総合研究振興会で開催している津波地質痕跡ワーキンググループでもやや懐疑的です。一方で宝水を超える津波の証拠は橋杭岩の津波石から見つかっているので、年代の部分のみ削除することを提案します | 提案の通りになりたいと思います。 |
| 73 | 穴倉 | 6 | 9~11 | 高知県県の蟹ヶ池(かにがいけ)では、約2,000年前の津波堆積物がその年代の前後の津波堆積物に比べて厚く、 | 上記指摘と同様です。津波堆積物の厚さが必ずしも津波波源の規模を示すわけではないことは多くの津波堆積物研究の関係者が認識しております。以下の文章への差し替えを提案します。 「和歌山県の橋杭岩では、津波石の移動シミュレーションから、」 上記指摘と併せて、本文はあまり変更しないという方針であれば無視していただいて構いません。ご確認ください。 | 提案の通りになりたいと思います。 |
| 74 | 穴倉 | 60 | 下から3~6行目 | しかし、津波堆積物の痕跡が見つかる地点はまだ少なく、過去に起きた地震の全体像を描くには不十分である。今後は、歴史記録や津波堆積物など過去地震の痕跡データの収集を網羅的に行う必要がある。 | 【修正案】 しかし、津波堆積物の痕跡が見つかる地点は限られており、過去に起きた地震の全体像を描くには質、量ともに不十分である。今後は、歴史記録や津波堆積物など過去地震の痕跡データの収集を網羅的に行うとともに、津波堆積物については、地域間の対比のための年代推定の精緻化を進め、隆起痕跡や液状化痕跡などと併せた調査が必要である。 | 提案の通りになりたいと思います。 |
| 75 | 西村 | 2 | 下から2行目 | また、他の海溝型で採用されている | 「海溝型」は「海溝型地震」の方が良い。 | 修正しました。 |
| 76 | 西村 | 7 | 11行目 | 70%信用区間の発生確率 | 私には「発生確率の70%信用区間」または「70%信用区間で発生確率」の方が自然に思えるが | 修正しました。 |
| 77 | 西村 | 9 | 8行目 | 観測点はまだ少なく、観測点の空間密度を向上させる必要がある。 | 日本語の好みの問題であるのだが、「観測点数が少なく、今後空間密度を向上させる必要がある」のがスムーズに読める | 提案の通りになりたいと思います。 |
| 78 | 西村 | 61 | したから15行目 | 定期的な地殻変動が観測されてきており | 定期的な地殻変動が観測され(きておりを削除)の方が自然。GNSS-Aの成果が出てから15年以上が経過してもはや当たり前になっており、「きており」は不要 | 提案の通りになりたいと思います。 |
| 79 | 西村 | 61 | したから9行目 | 観測点はまだ少なく、観測点の空間密度を向上させる必要がある | 2つ上と同様。 | 提案の通りになりたいと思います。 |
| 80 | 石川 | 9 | 7 | DONETではリアルタイムで海底地殻変動が観測されてきているが | 4行目記載のGNSS-AIによる【定期的な地殻変動】と区別するため、「DONETでは短期的なゆっくりすべり等」にともなう海底の地殻変動がリアルタイムで観測されてきているが」に修正してもらいたい | 修正しました。 |
| 81 | 石川 | 61 | 27 | リアルタイムで地殻変動が観測されてきているが、 | 同上の理由で「短期的なゆっくりすべり等」にともなう海底の地殻変動がリアルタイムで観測されてきているが、」に修正してもらいたい | 修正しました。 |
| 82 | 飯沼 | 9 | 7 | DONETではリアルタイムで海底地殻変動が観測されてきているが、観測点はまだ少なく、観測点の空間密度を向上させる必要がある。 | 下記に述べる説明文61ページのものを読み直すと、ここで言及されているリアルタイム海底地殻変動観測は孔内観測のことを指していると思われる。「DONETでは」という表現では誤解を招く恐れがある。「海底下に設置された長期孔内観測システムでは～」としていただくと思う。 | 修正しました。 |
| 83 | 飯沼 | 61 | 27 | DONETでは、Araki et al. (2017)にて報告されているように、リアルタイムで地殻変動が観測されてきているが、 | Araki et al. (2017)でゆっくりすべりによる地殻変動をリアルタイムに観測したとしているのはDONETのデータではなく、長期孔内観測システムのデータによるものであり、「DONETでは」という表現は相応しくない。「海底下に設置された長期孔内観測システムでは～」としていただくと思う。あと、et al.のあとのカンマは不要。 | 指摘事項2点修正しました。 |
| 84 | 汐見 | 1 | 22-24 | 今回、データ及びパラメータの不確実性を考慮した確率計算手法を採用し、将来南海トラフで大地震が発生する確率のみ改訂し、第二版の一部改訂としてとりまとめた。 | 「～し、」が繰り返されている。 「(略)大地震が発生する確率のみ改訂した結果を第二版の一部改訂としてとりまとめた。」としてはどうか。 | 修正しました。 |

| | | | | | | |
|-----|----|---------|----------------|--|--|---|
| 85 | 汐見 | 2 | 23 | 80年近くが経過しており | 昭和東南海地震(1944年)からは既に80年「以上」経過しており、80年「近く」という表現は不適切である。「約80年が経過しており」、あるいは単に「80年が経過しており」などではどうか。 | 提案の通りにしたいと思います。「約80年が経過しており」を採用します。 |
| 86 | 汐見 | 2 | 33 | 一部の新たな知見が得られている。 | 「一部」で「新たな知見が得られている」ではないか。 | 修正しました。 |
| 87 | 汐見 | 3 | 15 | 今回の一部改訂においても、同様である。 | 「今回の一部改訂においても、同様」とした「」ではどうか。 | 提案の通りにしたいと思います。 |
| 88 | 汐見 | 7 | 20-21 | これらを考慮した隆起量データを使用することとした。 | 隆起量データとしては、史料上、一定の値が示されている。「隆起量データにこれらを考慮することとした」ではどうか。 | 提案の通りにしたいと思います。 |
| 89 | 汐見 | 9 | 16 | 時間予測モデル(すべり量依存モデル)を用いているが | 改訂前の話と理解しているので「～用いてきた」(過去形)ではないか。 | 修正しました。 |
| 90 | 汐見 | 13 | 図4 | | 図面は一人歩きすることがある。 評価時点の具体的な年月日を記載した方がよいのではないか。 | 修正しました。 |
| 91 | 汐見 | 14 | 表2-1 | 経過時間79.0年 | 昭和南海地震からの経過年数を採用したと理解するが、説明文P.43で発生確率の評価において「南海地域と東海地域で発生した地震の発生時期が異なる場合は両者の平均値を用いることとした」との矛盾は生じていないか？ | 1944/12/7と1946/12/21の平均値は1945/12/14なので、2025/1/1からそれを引いた28873日を365.2425で除した79.1年に修正しました。 |
| 92 | 汐見 | 15 | 表2-2 | 同上 | 同上 | 79.1年に修正しました。 |
| 93 | 汐見 | 17 | 6 | 80年近くが経過し、 | 昭和東南海地震(1944年)からは既に80年「以上」が経過しており、80年「近く」という表現は不適切である。「約80年が経過し」などではどうか。 | 提案の通りにしたいと思います。「約80年が経過しており」を採用します。 |
| 94 | 汐見 | 41 | | | 改ページ位置が不自然 | 修正しました。 |
| 95 | 汐見 | 44 | 13, 18 | 1361年以前 | 1361年正平地震については、ケースⅢ及びⅣも用いている。「1361年より前」あるいは「1098年以前」がより正確かと思われるがどうか。 | 1361年より前に変更します。また、他にも同様の誤用があったため、「以前」→「より前」に修正しております。 |
| 96 | 汐見 | 47 | 表4-3 | | ベイズ推定の括弧内記載の数値の意味が表だけでは分からない。隣の最尤法のように、期待値を表していることを項目欄に記載してはどうか。 | (期待値)という文言を追加しました。 |
| 97 | 汐見 | 47 | 6 | 最も低いケースⅠで8%～20%となる一方 | 最も低いのはケースⅡではないか。 | ケースⅡに修正しました。 |
| 98 | 汐見 | 9 | 7-8 | DONETではリアルタイムで海底地殻変動が観測されてきているが、観測点はまだ少なく、観測点の空間密度を向上させる必要がある。 | N-netが完成したことによって言及しなくて良いか？ただし、N-net水圧計の地殻変動観測への効果は未知数であることから、「DONETでは(中略)されてきている。今後は、新たに整備されたN-netの活用に向けた研究開発の加速や更なる観測点密度の向上を進める必要がある」などとしてはどうか？ | 新たに整備されたN-netの活用に向けた研究開発の加速についても進める必要がある。という一文を付け加えました。 |
| 99 | 汐見 | 33-34 | | 1)地震活動 | 2024年8月8日の日向灘の地震やSSEの活動状況などの情報は追記・更新しなくて良いか？ | 2024年8月8日の日向灘の地震について追加しました。 |
| 100 | 汐見 | 61 | 24-25 | プレート間の固着分布を調査研究した事例は依然として少ない。 | 第二版発行から十余年を経て、相当するの調査観測事例が報告されているとの認識である。例えば、「プレート間の固着分布の調査研究は現在も精力的に実施されており、解解能や精度向上が進められている。」としてはどうか。 | 提案の通りにしたいと思います。 |
| 101 | 汐見 | 61 | 27-29 | DONETでは、Araki et al., (2017)にて報告されているように、リアルタイムで地殻変動が観測されてきているが、観測点はまだ少なく、観測点の空間密度を向上させる必要がある。 | N-netが完成したことによって言及しなくて良いか？ただし、N-net水圧計の地殻変動観測への効果は未知数であることから、「DONETでは(中略)されてきている。今後は、新たに整備されたN-netの活用に向けた研究開発の加速や更なる観測点密度の向上を進める必要がある」などとしてはどうか？ | 新たに整備されたN-netの活用に向けた研究開発の加速についても進める必要がある。という一文を付け加えました。 |
| 102 | 汐見 | 101-103 | 図3-28～30 | 1923 01 01 00:00 — 2012 12 31 24:00 | 評価時点の情報(— 2024 12 31 24:00)に更新しなくて良いか？ | 【P】図の時点更新 |
| 103 | 岡村 | 1 | 1. の4行目 | 約100～200年 | 約90～200年とした方がよい。この2行下に「昭和の地震から80年近くが経過」と書かれていて、最初だけ読んだ人はまだ20年以上先と思う可能性が高い。10年後に起こる可能性が十分あることを伝える必要がある。 | 提案の通りにしたいと思います。 |
| 104 | 岡村 | 7 | 最後の4行から次ページ1行目 | 最大クラスの地震の……発生頻度は……100～200年の間隔大地震に比べ、一桁以上低いと考えられる。 | 文章は間違っていないと思うが、宝永地震クラスでも、局所的には最大クラスに匹敵する非常に強い強震動や高い津波が発生する場所もありうることも書いたほうがよい。 | なお、宝永地震と同程度の規模の地震でも、局所的には最大クラスに匹敵する非常に強い揺れや高い津波が発生する可能性がある。と付け加えました。 |